
桜の道

RIO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の道

【コード】

N5284K

【作者名】

RIO

【あらすじ】

桜の下で起きた一つの小さな物語

ひらひらと泡色を纏いながら落ちてゆく花びらたち。

その桜で出来たピンク色のトンネルを一人歩いていく。

日差しが花びらに当たりまるであたりにピンク色の宝石が散った用に綺麗だ。

こんな景色を見ていると私まで晴れやかな気持ちになっていく。

足は軽やかに桜の道を進んでいく。

ふと隣の白い家を見る、二階の窓その窓からおばあさんが一人笑いながらこちらに向かって手を振っている。

見たことのない人だった。

だけど今はそんな事関係ないだろう手を振ってくれているのだここはこっちも笑顔で返さなければ。

そう思いこちら手も手を振り挨拶をする。

それからというものは毎日この名前も知らないおばあさんに挨拶するのが私の日常となっていた。

何気ない事だけどなぜかそれが嬉しかった。

それから2週間後おばあさんが亡くなったという事を母に聞いた。

死因は心筋梗塞だったらしい。

悲しくなかったと言えは嘘になるがこれといってそこまで大きなショックを受けたわけでもなかった。

まあ、それもそうだろうあのおばあさんとは話すらしたこと無かったんだから。

ただど何だろうこの胸に残る虚無感は、あの日以来心を覆っているこの感じは、分からないだから答ええを求めた見つかると思ったあの家に行く。

桜はすでに散り若葉が芽吹いていた。

二階の窓を見る、当たり前だがそこにおばあさんの姿は無い。
もうあのころの景色はそこには無かった。

悲しい訳ない悲しいはず無いのになぜか涙が一筋流れ落ちた。

それと同時にその涙を拭い去るそうにサラサラと暖かく優しいかぜ
が吹く。

そのときの光景は一生忘れないだろう。

波寄せる木々たちその木全てに桜が再び咲いていたのだ。

桜が見えたのは風の吹いている一瞬だけあれは幻だったのだろうか？

うつん違ふあれは幻なんかじゃないあれは・・・

空を見上げる、今日は雲ひとつ無い晴天、足は軽やかに思い出を胸
に私は道を歩き出す。

(後書き)

訳がわからなくてすみません。

衝動で書いてしまいました。

もっとしっかりした話を書けるように精進したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5284k/>

桜の道

2010年10月14日03時40分発行